

心の教育は人なり

妙高・斐太北小学校

1 言葉で示す

「子どもたちに『なかよくしましょう。』と言うのなら、まず、私たちがなかよくしましょう。」

私は、毎年度初め、学校経営の基本方針を職員に示す際、そう語りかける。「なかよく」の他にも、「自分の立ち位置は、子どもの側にあるだろうか」「何をおいても、子どもにかかわることは、最優先ですぐやろう」ということについても、私たち職員が大切にしたいこととして話をする。いずれも、「心の教育」につながる大切にしたい心構えだと思っている。そして、最後に「子どもたちと共に生きることで、私たち職員もよりよい生き方に近づくことができる」ということも話す。心の教育は、子どもたちのための教育であると共に私たち職員にとっても価値ある教育であると考えている。

2 行動で示す

「相手によって態度を変えない人であってほしい。目の前の人を大切にできる人であってほしい。」「道徳の授業で学んだことを日々の行動に生かしてほしい。」「言葉と行動が一致する人であってほしい。」そう子どもたちに願っている。子どもたちに願うことを職員が行動で示したい。まずは、校長の私から…。あいさつは、にっこり笑顔で自分から。忙しくても、しっかり顔を上げて、相手の目を見て話を聞く。子どもにかかわるいろんな職種のみんなで「チーム斐太北」、力を合わせる。学校に来られる方には、誰にでも感じよく、ていねいに…。なるべく頑張っている。

私の行動が、職員に伝わり、職員の行動が子どもたちに伝わり、子どもたちの心が育つと嬉しい。

3 授業で示す

教諭時代から続けている授業がある。部落差別問題そのものをテーマとする授業である。校長の今は、六年担任とチームティーチングで、八時間を実施する。全八時間公開、参観自由としている。私にとっては、心の教育で目指しているものを授業で示す場でもある。正しいこと、カッコいいことを口で言っている一方で、正しくできない、カッコよくできない自分もいる。子どもたちのそこに踏み込む。校長の私も当事者でなければならない。自分の心のゆらぎ、自分の情けなさも自己開示しなければならない。正直、しんどい時もあるが、子どもたちと本気で本音で話ができ、考えることができた実感できることは、何事にも替えがたい価値がある。道徳の教科化が目指す授業の質的転換は、正にそこにあると私は思っている。